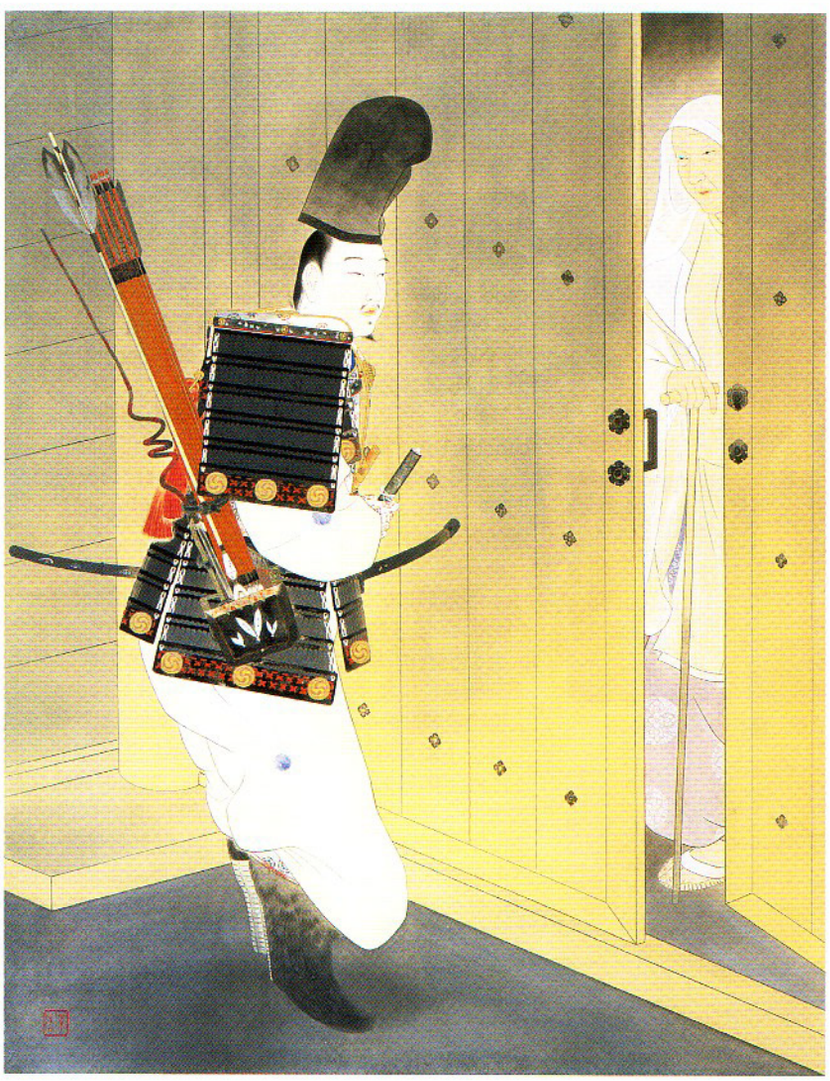
福田恵一と森戸果香

ふくやま美術館

2013年10月2日(水)－12月15日(日)　会場：常設展示室

※月曜休館／但し10月14日(月)、11月4日(月)は開館、10月15日(火)、11月5日(火)は休館



1. 森戸果香《訪れ》

福田恵一(1895－1956)と森戸果香(1898－1992)は、ともに福山市出身で大正末頃から昭和にかけて帝展、新文展、日展などで活躍した日本画家である。これまで2人の交友を示す資料は見つかっていないが、いずれも歴史人物画を得意とした。

森戸果香《訪れ》(No.1)は、1950(昭和25)年、第6回日展の出品作であり、52歳の作品である。『平家物語』から着想を得た森戸は、今生の別れとなる2人、平忠度と藤原俊成の緊迫した場面を描いたものである。平清盛の末弟の薩摩守忠度(さつまのかみただのり)(平忠度)が、平家一門の終焉を悟り、この世の最後の願いに、「新しく勅撰和歌集(天皇の命令によりつくられる和歌集)が出される際には、ここから一首だけでも選んで欲しい」と、日ごろ書きとめた百首ばかりの歌の入った巻物を鎧の胸元より取り出し、和歌の師である俊成に形見として手渡そうとする場面である。

後に俊成は、この願いを胸に朝敵となった忠度の名はふせて詠み人知らずとして、「さざ波や　志賀の都は荒れにしを　昔ながらの山桜かな」を『千載和歌集』に選んだとされる。このエピソードは、『平家物語』に盛り込まれ広く知られることになった[1]ものである。

この度の所蔵品展では、遺族や関係者に遺されていた作品、未公開の貴重な模本など近年寄贈を受けた作品や購入作品により、2人の画家の軌跡を紹介する。

9. 森戸果香《福山城下絵》(部分)

2. 森戸果香《随身庭騎絵巻　模本》(部分)

5. 森戸果香《伴大納言絵詞　上巻　模本》(部分)

5-2. 森戸果香《伴大納言絵詞　上巻　模本》(部分)

6. 森戸果香《伴大納言絵詞　下巻　模本》(部分)

7. 森戸果香《病草紙　模本》(部分)

8. 森戸果香《粉河寺縁起　模本》(部分)

森戸果香と福山

《福山城下絵》(No.1)は、森戸果香が20歳代から40代後半にかけて断続的に描かれた作品である。森戸の自著『葦笛』(昭和44年3月10日発行)によれば、「私が絵を描き始めていくばくもない大正8年のころであった。帰省中吉田東里の画いた旧福山城の絵の模写を頼まれた。東里は狩野・四条・文人画の好まれた福山地方には珍しい画風の人である。絵は想像するに、築切南岸近いどこかの屋上より、晩秋の城郭を写生し、見えないまでも要所を画加わえたもので、石垣などたんねんに線描され、小品ながら労作とみられた[2]」と回想し、「幼いころから、城はなじみ深いものであったが、往昔の城の概要は、この絵の模写によって知ることを得た[3]」とある。本作は、吉田東里の描いたものを基に、この頃描き始められたと考えられる。

現在、その依頼のあった模写の所在は不明であるが、回想文では、数日をかけて完成したこの模写は、十数年あとに森戸が見た時、「賜天覧」の大きな朱印が押されていた[4]という。

1945(昭和20)年、群馬県沼田で疎開中であった森戸は、「なに心なく画きかけの古い福山城の、下図を取り出して画いていた[5]」とある。夜中にラジオで福山が空襲に遭ったと知り、翌朝、近所の子どもから城が焼けたということを知った後も「城を画く手を休めなかった[6]」とある。

森戸果香と縁戚関係にある岩崎博氏によれば、「画伯はその後も折にふれこれに加筆しつつ未完のまま今日に至っている[7]」と記し、遺族の協力のもと本作の図版の写し(部分)を『備後春秋』に収録している。戦中から戦後にかけて森戸が40歳代を過ぎても福山城に手を加えていたことが、うかがい知ることが出来る。

焼け落ちた天守閣や追手門なども巧みに表現された本作は、森戸の戦災前の福山城に対する思いと往昔の城の概要をみるうえで貴重なものである。

歴史画家への道

森戸の回想文『夕笛』には、「父が骨董趣味の人で、色々にその道の話を聞かされていたせいか、何となく絵も好むと云う程にもなしに描いていた[8]」と記されている。また「種々の歴史画・美人画・名所図などの錦絵の点符されたのを見て暮していた[9]」などの事由により自然と画家を目指したのだという。青年期頃には、文展の絵葉書をみて油彩画や彫刻にも興味を持つなど多感であった。

森戸は、川端龍子にその方面について伺いの手紙を書く[10]が、父は「絵をやるなら土佐絵がよい[11]」と、父が東京にいた友人に手紙で依頼し、その紹介で小堀鞆音(1864-1931)に入門した。明治期において、武者絵など歴史画を得意とした第一人者の小堀は、時代考証の研究から、古画の模写をはじめ考古趣味も古い鎧など細部の金具にいたるまで熟知していたという。小堀の作画態度は、当時の環境や登場人物の史的役割などを、おろそかにしなかったため、多くの歴史画家の規範となった。

歴史上の人物や事件を描く歴史画は、近代以前にも多く描かれた。仏画、仏教説話も広義では歴史画であり、戦記物語や社寺の縁起など優れた絵巻物がある。ただし、歴史画に新しい意味を見出したのは、明治10年代後半、文明開化の反動としておこった国粋保存運動からであった。歴史画復興の契機となり、新聞・雑誌などに時代ものが取り上げられ挿絵が描かれるようになった。そのため、画家たちは、いにしえの朝廷、武家をはじめ一般の風俗、習慣、服装などの研究、いわゆる有職故実を学ぶ必要があった[12]。

森戸は、「私がこの道へ入った頃は、明治以降の大和絵の黄金時代の名残を、極めて濃く遺していた[13]」といい、「日暮里の小堀先生宅の玄関に近い部屋で、若い門人達が盛んに絵巻など、粉本を模写していた[14]」とある。森戸の描いた模本類も、小堀が所蔵していた粉本類を大正から昭和初期にかけて模写したものである。

2012(平成24)年に遺族より、ふくやま美術館が受納したこれらを含む26点の模本類は、《前九年合戦絵詞 模本》、《後三年合戦絵詞 上巻 模本》、《結城合戦絵詞 模本》など、戦記絵巻を多く含み、長い時間をかけて模写されたものである。

《病草子 模本》(No.7)は、箱書から1917(大正6)年に小堀鞆音所蔵の模本を森戸が模写したものとわかる。その他、これ以外の模本にも奥書などに江戸・明治の模写人名が記されている。森戸の師・小堀は、明治20年代の臨時全国宝物取調べの際、岡倉天心らによって進められた帝国博物館による大規模な模写・模造事業に参画し、関西の寺社などに派遣され模写を行った画家のひとりであった。1908(明治41)年に小堀は、東京美術学校の教授となり、森戸が入門した1918(大正7)年の前年には帝室技芸員に任じられていた。小堀門下では、有職故実の研究や時代考証の大切さ、模写の重要性が説かれたといい、こうした事業に関わっていた小堀所有の模本類もその質はかなり高かったと考えられる。

《粉河寺縁起 模本》(No.8)は、絵具の剥落、焼痕などが忠実に模写されるなど興味深い特徴が見られる。

《伴大納言絵詞 上巻 模本》(No5)、《伴大納言絵詞 下巻 模本》(No6)は、中巻が抜けているものの、上巻・下巻に関しては、欠損部分まで忠実に臨模されていることがわかる[15]。とくに応天門の火災やクライマックスの逮捕され護送される伴大納言など、移りゆく場面を劇的に表現した絵巻の感動を的確に模写している。

《随身庭騎絵巻 模本》(No2)は、9人の随身たちの騎馬姿を描いた鎌倉時代の絵巻で、後に森戸が第2回新文展で特選を受賞した《矢叫び》の荒々しい馬の表現などに見事に結実している。

この頃の森戸は、歴史画家として「技巧は実に確かでその調子も線もまたなく良い。こういう作家が特選になったことは嬉しい[16]」などと賞賛された。その後も第3回新文展《秘曲》など官展での入選が続き、歴史人物画の中堅として画壇でも認められる存在となったが、第二次大戦後は、しばらく空白の時期が続く。川口直宜氏によれば、「(森戸が)戦後の日展の会風の中において、自己の歴史人物画の作風との乖離を感じた[17]」のではと考えられる。1950(昭和25)年、第6回日展《訪れ》(No1)で復帰を果たすものの、第7回日展《稚児文殊》、第8回日展《かぐや姫》と合わせて3回の出品のみで日展を離れた。

森戸は晩年まで、その作風を変えることなく、歴史人物画を貫いた生涯であったといえる。1992(平成4)年には、「秀郷流藤原氏の系譜ー森戸果香の絵画からー」が小山市立博物館で開催された。

福田恵一と歴史画

福田恵一は、1917(大正6)年、東京美術学校図画師範科を卒業し、大阪上宮中学校、陸軍幼年学校、大阪生野女学校、大阪美術学校などで教鞭をとっていたが、1923(大正12)年に、堂本印象・中村大三郎・上村松篁らを輩出した京都の画塾青甲社に入って西山翠嶂に師事した。翌年、第5回帝展に《薄れゆく斜陽に暮る》が初めて入選、第6回展では《豊公》(三幅対)、《使命》を出品、前者は特選となった。

福田が教師から日本画家に針路を転換した動機、経緯については、はっきりしない。今から11年程前、広島県立美術館で開催した「日本画の異彩三人展 ー福田恵一・猪原大華・和高節二ー」図録で巻頭テキスト執筆した細野正信氏は、「小堀鞆音・結城素明・川合玉堂・松岡映丘らの優れた教官陣の影響、特に松岡門下の若い画家たちの新興大和絵運動の気分が伝わって教師に甘んじていられなくなったのであろう[18]」という見解を記している。

福田は、1928(昭和3)年、第9回帝展に《文覚》で再び特選を受賞した33歳まで教職を続けたが、その後、退職して画業に専念した。翌年の第10回帝展で3回目の特選を受賞。すでに帝展の人気作家に挙げられた。

《安養》(No10)は、福田が31歳の時に描いた第7回帝展出品作である。福田が幼くして亡くした我が子を弔う気持ちが込められているとされる。安養とはここでは安養国の略で、阿弥陀如来がいる極楽浄土を指していると考えられる。牧歌的な田園風景でありながら、三尊形式の仏画を思わせる画面構成がみられる。《仁正皇后》(1923年)、《豊公》(1925年)など歴史画においても仏教美術にかかわる様式を取り入れようとした試みが、大正から昭和期の作品に散見される。

日本の歴史以外にも題材を持ち、《寒山拾得》(No16)など中国唐代の僧に取材したものをはじめ、《イスパニアに寄る常長》(1923年 広島県立美術館蔵)、《使命》(1925年 堺市博物館蔵)などヨーロッパを舞台とした歴史画も描いている。描かれた時代も《柿本人麿呂》(No11)など飛鳥時代の歌人から、《宮本武蔵》(No13)、《平賀源内》(No15)、《坂本龍馬》(No23)と江戸時代の人物を幅広く描いている。2011(平成23)年、島田千秋氏より受贈した18点の福田恵一作品には、《元帥山本五十六閣下》など第二次大戦時の軍人を描いた肖像画や《桃太郎》(No18)といった伝承上の人物も含まれている。

1929(昭和4)年には、第10回帝展《重盛》で、前年の《文覚》から連続特選をとり、以後無鑑査の待遇をうけ、第15回帝展では審査員をつとめている。

《若き日の信長》(No19)は、颯爽と白馬にまたがった若武者、青年期の織田信長を描いている。前方を見据え、髪は茶筅に結い、湯帷子(ゆかたびら)の片袖をはずして、半袴、右手に長い槍を持っている。また、腰には朱鞘の太刀をさすほか、火打ち袋や糒(ほしい)などを入れた小袋をぶらさげている。福田は、これらの有職故実の表現を『信長公記』といった伝記、歴史書などをもとに研究して描いたと考えられる。1944(昭和19)年の戦時特別展(文展)に出品した《信長上洛》(愛知県美術館所蔵)の表現に近似しており、40歳代の時に描いたものと考えられる。

歴史画を得意とした画家らしく、端正な人物表現をはじめ、武具や衣装など綿密な時代考証と優れた技量がみられる。

《千利休》(No20)は、1946(昭和21)年の第2回日展に《露地の秋》の題で出品された、福田51歳の作品である。豊臣秀吉は、側室として千利休の娘を迎え入れたい旨を申し入れるが、利休は、その娘が未亡人で子どももいることから、その申出を断ったといわれている。秀吉による利休処刑の遠因になったともいわれる一件を画題に取り上げたものである。左側の男性が利休で、そのそばで寄り添う2人が、利休の娘とその子である。女性が手にする桐紋の反物は、秀吉から贈られたものだろうか。女性の表情は、利休のその後の死を暗示するかのように困惑と憂いがみられる。

10. 福田恵一《安養》

19. 福田恵一《若き日の信長》

11. 福田恵一《柿本人麻呂》

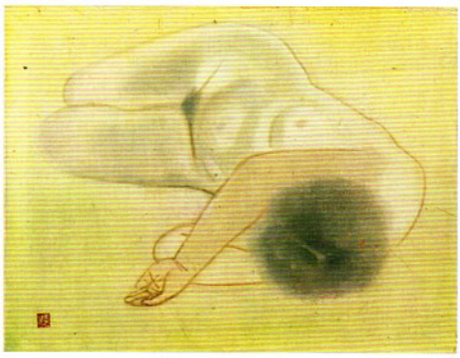
13. 福田恵一《宮本武蔵》

23. 福田恵一《坂本龍馬》

16. 福田恵一《寒山拾得》

15. 福田恵一《平賀源内》

20. 福田恵一《千利休》



22.福田恵一《裸婦》

戦前においては、1938（昭和 13）年の第 2 回新文展《おひろひ（い）》（秀吉と棄丸）、翌年、第 3 回新文展で無鑑査となった《山上》（埴輪風兵士）。1940（昭和 15）年の紀元二千六百年奉祝展に《雄図》（織田信長）など優れた歴史画を生み出した。

細野正信氏は、この西洋音楽を聴きながら、南蛮屏風に描かれた世界地図を眺めている織田信長を描いた《雄図》（愛知県美術館蔵）を「発想・構成・技法、特に陰影を排した明快な色調において歴史画に新風を送った[19]」と高く評価している。

後半生にいたるまで、歴史画を描き続けてきた福田であったが、第二次大戦の敗戦によって、その作画態度も変更を余儀なくさせられた。福田は、健康を害したこともあって、その後、日展などへの大作の発表は数回を数えるのみであったが、最後の出品となる 1952（昭和 27）年の第 8 回日展では、《ガラス》（愛知県美術館蔵）という題で、現代を生きる女性の裸婦を描くなど新機軸も見せた。《裸婦》（No.22）における現代の女性像は、この頃の作品と考えられる。

（学芸員・主査　大前勝信）

註

(1)山下明生『21世紀によむ日本の古典 11』2002年、ポプラ社、118 - 119頁
(2)森戸鐶次郎「かりの翼」『葦笛』1969年、56-57頁
(3)－(5) 同書 57頁
(6) 森戸鐶次郎「河鹿」『夕笛』1981年、51頁
(7)岩崎博「おわりに」『備後春秋 第56号』1993年、備後春秋編集部、23頁
(8)、(9) 森戸鐶次郎「河鹿」前掲書 51頁
(10)『夕笛』によれば、川端龍子には日本画ではなく、塑像を学ぶための方策について伺いの手紙を出したとある。
(11) 同書 51頁
(12)細野正信「近代日本の歴史画」『近代日本画　巨匠が描く歴史画名作展』1989年、尾道市立美術館、4頁
(13)森戸鐶次郎「河鹿」前掲書、52頁
(14) 同書 35頁
(15)『国宝　伴大納言絵詞』1994年、出光美術館の図版を参照した。
(16)川崎柳虹「作品評 第二回新文展」『日展史13 新文展編1』1984年、社団法人 日展、559頁(『美之國』昭和13年11月号)
(17)川口直宜「森戸果香筆「義朝父子」(目黒雅叙園美術館蔵)」『刀剣美術』2003年、財団法人 日本美術刀剣保存協会、23頁
(18)細野正信「福田恵一の歴史画」『日本画の異彩三人展 －福田恵一・猪原大華・和高節二－』2002年、広島県立美術館、6頁
(19) 同書 8頁

参考文献

『日本画の異彩三人展 －福田恵一・猪原大華・和高節二－』2002年、広島県立美術館
『小堀鞆音　没後80年展』2011年、佐野市郷土博物館

福田恵一（ふくだけいいち）　1895（明治 28）年～ 1956（昭和 31）年

広島県福山市に生まれる。1917（大正 6）年、東京美術学校（現在の東京芸術大学）図画師範科を卒業し、中学や陸軍幼年学校の教員生活をしばらく続けていたが、1923(大正 12)年、西山翠嶂に師事し、その画塾青甲社に入る。1924(大正 13)年、第 5 回帝展に《うすれ行く斜陽に暮る》が初入選、翌年、第 6 回帝展に《豊公》、《使命》を出品、前作は特選となった。その後、第 9 回帝展《文覚》、第 10 回帝展《重盛》で連続特選をとり、以後無鑑査の待遇をうけ、30 代で帝展の人気作家となった。1934（昭和 9）年、第 15 回帝展では、39 歳で審査員となり《主計頭清正》を出品。1936（昭和 11）年、文展招待展に《楠公》を出品。1938（昭和 13）年、第 2 回新文展に《おひろひ（い）》を出品。第 3 回新文展に《山上》、紀元二千六百年奉祝展に《雄図》、第 4 回新文展に《愛撫狗児》を出品。1942（昭和 17）年、約 2 カ月間にわたり従軍。1943（昭和 18）年、第 6 回文展に《御楯》、1944（昭和 19）年、文部省戦時特別展に《信長上洛》と歴史画を中心とした人物画を出品した。第二次大戦後、一時制作活動を休止。戦後の日展では、1946（昭和 21）年、第 2 回日展に《露地の秋》（《千利休》）、第 4 回日展に《淀の方茶々姫》を出品。1952（昭和 27）年には、第 8 回日展に《ガラス》を委嘱出品、現代的な女性像をモチーフにした新機軸も見せた。

森戸果香（もりとかこう）　1898（明治 31）年～ 1992（平成 4）年

広島県福山市に生まれる。本名は鐶次郎。1918（大正 7）年に上京して小堀鞆音の門人となる。その後帰郷して、1924（大正 13）年に地元で写真館を開業。しかし、1929（昭和 4）年には、画家になる決意を固めて写真館をたたみ、再び上京する。画題には多く歴史人物画が取り上げられ、再上京直後の同年、第 10 回帝展に《天草四郎時貞》が初入選。1931（昭和 6）年、第 12 回帝展《敦盛》。1933（昭和 8）年、第 14 回帝展《鞍馬の稚児》。1936（昭和 11）年、改組第 1 回帝展《清盛》。1937（昭和 12）年、第 1 回新文展《遮那王》。そして、1938（昭和 13）年、第 2 回新文展に《矢叫び》を出品し、特選を受賞した。その後も 1939（昭和 14）年、第 3 回新文展に《秘曲》。1940（昭和 15）年、紀元二千六百年奉祝展に《実盛》。1941（昭和 16）年、第 4 回新文展に《つは（わ）もの達》。翌年、第 5 回新文展に《嗣信の最期》を出品した。第二次大戦後は、1950（昭和 25）年、第 6 回日展に《訪れ》。1951（昭和 26）年、第 7 回日展に《稚児文殊》。そして 1952（昭和 27）年、第 8 回日展に《かぐや姫》を出品するなど、戦前から、戦後にかけて帝展・新文展・日展と官展を中心に活躍し、特選を含めて 13 回の入選を果たした。

【編集後記】

ここ備後地方は、明治以降、多くの日本画家を輩出してきた土地ですが、優れた描写力を持ちながらも、歴史の中に埋没していった画家たちもいます。とくに戦後のモダニズムのうねりの中で、伝統的な画題の日本画は評価されることが少なくなってきました。ここに紹介する福山出身の福田恵一と森戸果香もそういった日本画家で、歴史画を得意とし、帝展、新文展でそれぞれ特選まで受賞しています。今回は、作家のご家族や関係者から最近寄贈を受けた作品、および購入作品によって特集展示を構成しています。実力派の日本画家の技量の程をとくとご覧いただききたいと思います。（学芸課長　谷藤史彦）

ふくやま美術館所蔵品展示目録 No.123
発行日／2013年10月2日　編集・発行／ふくやま美術館（福山市西町2-4-3）　印刷／アート印刷株式会社

第1室：福田恵一と森戸果香

＊寄託作品

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横 (cm)	
1	森戸果香	(1898 – 1992)	訪れ	1950	紙本着色	187.5×145.0	
2	森戸果香		随身庭騎絵巻　模本	1920 頃	紙本墨画着色	36.4×262.5	
3	森戸果香		平家物語絵巻　模本	1920 頃	紙本墨画(紙本白描)	38.2×735.0	
4	森戸果香		忠度百首一巻　下絵図　模本	1918	紙本墨画(紙本白描)	27.5×1209.5	
5	森戸果香		伴大納言絵詞　上巻　模本	1920 頃	紙本墨画着色	34.0×860.0	
6	森戸果香		伴大納言絵詞　下巻　模本	1920 頃	紙本墨画着色	34.0×941.0	
7	森戸果香		病草子　模本	1917	紙本墨画着色	37.6×966.0	
8	森戸果香		粉河寺縁起　模本	1920 頃	紙本墨画着色	36.4×1408.0	
9	森戸果香		福山城下絵	1920-45頃	紙，鉛筆，墨	75.0×362.0	
10	福田恵一	(1895 – 1956)	安養	1926	絹本着色	236.0×434.5	
11	福田恵一		柿本人麻呂	1940 年代	絹本墨画着色	51.0×51.0	
12	福田恵一		武将	1940 年代	絹本着色	49.0×54.0	
13	福田恵一		宮本武蔵	1940 年代	絹本着色	39.5×43.5	
14	福田恵一		千利休	1940 年代	絹本着色	51.7×50.0	
15	福田恵一		平賀源内	1940 年代	絹本着色	39.5×45.0	
16	福田恵一		寒山拾得	1940 年代	紙本墨画着色	129.5×31.0	
17	福田恵一		花下佳人図	1927	絹本着色	51.5×54.0	＊
18	福田恵一		桃太郎	1940 年代	絹本着色	38.0×52.5	
19	福田恵一		若き日の信長	1940 年代	絹本着色	49.0×57.0	
20	福田恵一		千利休	1946	絹本着色	186.0×186.0(各)	＊
21	福田恵一		牛		絹本着色	32.0×45.0	
22	福田恵一		裸婦		絹本着色	42.5×54.5	
23	福田恵一		坂本龍馬	1940 年代	色紙着色	27.0×24.1	
24	福田恵一		達磨	1940 年代	色紙着色	27.0×24.0	

第2室：日本の近現代美術

＊寄託作品

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	
25	岸田劉生	(1891 – 1929)	橋	1909	油彩，カンヴァス	33.6×45.7	
26	岸田劉生		静物（赤き林檎二個とビンと茶碗と湯呑）	1917	油彩，カンヴァス	33.7×45.8	
27	岸田劉生		新富座幕合之写生	1923	油彩，カンヴァス	31.9×41.0	
28	岸田劉生		麗子十六歳之像	1929	油彩，カンヴァス	47.2×24.8	
29	吉田卓	(1897 – 1929)	自画像	1919	油彩，カンヴァス	33.0×23.5	
30	南薫造	(1883 – 1950)	夏	1919	油彩，カンヴァス	116.7×91.0	
31	児島虎次郎	(1881 – 1929)	ベルギー、ガン市郊外	1909-12頃	油彩，カンヴァス	64.5×80.5 安田コレクション	
32	梅原龍三郎	(1888 – 1986)	仙酔島の朝	1932 頃	油彩，カンヴァス	65.5×80.5	＊
33	安井曾太郎	(1888 – 1955)	手袋	1943-44	油彩，カンヴァス	89.3×72.8	＊
34	林武	(1896 – 1975)	妻の像	1927	油彩，カンヴァス	90.9×72.7	
35	須田国太郎	(1891 – 1961)	冬の漁村	1937	油彩，カンヴァス	48.5×59.7	
36	熊谷守一	(1880 – 1977)	女の顔	1931	油彩，板	41.0×32.0 安田コレクション	
37	北大路魯山人	(1883 – 1959)	金銀彩武蔵野鉢	1925-34	陶	15.2×27.5×27.5	
38	金重陶陽	(1896 – 1967)	一重切花入	1964	陶	20.0×13.0×11.0	
39	青木大乗	(1891 – 1979)	鞆　仙酔島	1935	紙本着色	148.0×297.0(各)	

＊寄託作品

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
40	山口長男	(1902−1983)	堰形	1959	油彩, 合板	183.0×274.0
41	靉嘔	(1931−)	Violin on the chair	1967	油彩, 木	75.0×45.0×50.0
42	高橋秀	(1930−)	ブルーボール＃101	1971	油彩, カンヴァス	142.0×190.0
43	高松次郎	(1936−1998)	形(No.1201)	1987	油彩, カンヴァス	218.0×182.0
44	松本陽子	(1936−)	ベイルシエバの荒野	1990	アクリル, カンヴァス	200.0×200.0
45	野田弘志	(1936−)	ガラスと骨Ⅱ	1990	油彩, アクリル下地, カンヴァス	146.0×112.0
46	中川直人	(1944−)	アフリカの女王	1982	アクリル, カンヴァス	150.0×178.0
47	堀内正和	(1911−2001)	線C	1954	鉄	45.0×78.0×46.0
48	土谷武	(1926−2004)	植物空間Ⅵ	1990	鉄	64.0×57.5×41.5
49	野田正明	(1949−)	可能性	2005	ブロンズ	50.0×49.0×40.0

第3室：ヨーロッパ美術

＊寄託作品

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	
50	ギュスターヴ・クールベ	(1819−1877)	波	1869	油彩, カンヴァス	34.5×51.8 安田コレクション	
51	ジュゼッペ・パリッツィ	(1812−1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩, カンヴァス	49.0×72.0	
52	ジョヴァンニ・セガンティーニ	(1858−1899)	婦人像	1883-84	油彩, カンヴァス	120.0×87.0	
53	ジャコモ・バッラ	(1871−1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩, カンヴァス	51.0×60.5	
54	アルベール・マルケ	(1875−1947)	停泊船、曇り空	1922	油彩, カンヴァス	38.4×46.0 安田コレクション	
55	パブロ・ピカソ	(1881−1973)	近衛騎兵(17,18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩, パネル	81.0×60.0	＊
56	パブロ・ピカソ		りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩, カンヴァス	16.0×22.0 安田コレクション	
57	ウンベルト・ボッチョーニ	(1882−1916)	カフェの男の習作	1914	油彩, カンヴァス	58.0×46.0	
58	モーリス・ユトリロ	(1883−1955)	酪農場	1916	油彩, 板	51.0×65.0 佐藤コレクション	
59	ソーニャ・ドローネー	(1885−1979)	色彩のリズム	1953	油彩, カンヴァス	100.0×220.0	
60	クルト・シュヴィッタース	(1887−1948)	抽象19(ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩, 厚紙	69.5×49.8	
61	メダルド・ロッソ	(1858−1928)	門番の女性	1883	ワックス, 石膏	37.0×30.0×17.0	
62	ジョルジュ・ルオー	(1871−1958)	ユビュ王	1939頃	油彩, カンヴァス	45.5×68.5 安田コレクション	
63	ハンス・リヒター	(1888−1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩, カンヴァス	60.0×47.0	
64	ピエロ・マンゾーニ	(1933−1963)	アクローム	1961	小石, カンヴァス	70.0×50.0	
65	ルチオ・フォンタナ	(1899−1968)	空間概念−銀のヴェネツィア	1961	油彩, ガラス, カンヴァス	60.0×50.0	
66	ジョルジョ・デ・キリコ	(1888−1978)	広場での二人の哲学者の遭遇	1972	油彩, カンヴァス	80.0×60.0	
67	サンドロ・キア	(1946−)	少女	1981	油彩, パステル, 紙, カンヴァス	194.0×150.0	
68	ペリクレ・ファッツィーニ	(1913−1987)	風(踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0×80.0×90.0	

和室　松本コレクション「晩秋」

＊寄託作品

No.	作家名	(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)	
69	碌々斎	(1837−1910)	飛石画賛	明治時代	紙本墨画、墨書	100.5×27.0	＊
70	作者不明		木彫獅子香合	江戸時代	木、漆	5.5×8.4×6.7	＊
71	樂一入(樂家4代)	(1640−1696)	茶入　銘 子猿	江戸時代	陶	7.0×5.5×5.5	＊
72	樂　吉左衛門	(1949−)	黒樂茶碗　銘 赤雲西	2000	陶	9.5×11.8×12.4	＊
73	樂慶入(樂家11代)	(1817−1902)	黒樂茶碗　ノンコウ七種　鶉うつし	江戸時代	陶	8.3×12.2×12.2	＊